

自己決定と絶対的理解者の存在意義
—事例研究としての牧野富太郎とさかなクン、
そして『傲慢と善良』

関戸 冬彦、杉浦佐知子、森田 敦子

Self-Determination and the Significance of Soul Mate's Existence
- A Case Study of Tomitaro Makino, Sakana-kun,
and *Gouman To Zenryo*

SEKIDO Fuyuhiko, SUGIURA Sachiko, MORITA Atsuko

The main purpose of this report is to introduce some cases about the importance of self-determination based on analyzing two scholars, Tomitaro Makino and Sakana-kun, who accomplished unexplored areas for their studies, as well as to reveal the significance of the role of their soul mates to achieve their goals. First, the definition of self-determination in this report will be clarified with the brief introduction. Second, several examples of Makino and Sakana-kun with their careers and soul mates will be reported as case studies. In addition, the heroine's mother in *Gouman To Zenryo* as the opposite existence to them will be examined. Finally, summarizing their relationships, self-determination and the significance of soul mate's existence will be discussed.

はじめに

本稿は自己決定と絶対的理解者の存在意義に関して、好きという気持ちを基に自己決定をして人生を選び、単に好きを越えて研究の領域にまで踏み込んで結果として前人未踏と呼んでも過言ではない功績を残してきた人物たち、具体的には牧野富太郎とさかなクン、に着目しその人物像を考察すると共に、それを支えるにあたって重要な役割であったろう絶対的理解者の存在意義について

考察するものである。よって本稿ではまずは自己決定の大切さについて述べ、その後牧野とさかなクン両者の経歴的な軌跡を確認しながら両者の共通性を検討、そして同時に彼らを支えた絶対的理解者の存在について言及しつつ、またそれとは逆の存在とその影響を辻村深月の小説『傲慢と善良』に登場する女性主人公の母親の言動を通して確認しながらこれらの関係性を検討していく。

1 自己決定の大切さ

でははじめに自己決定とその大切さについて先行研究を基に考えていきたい。まず、自己決定とはそもそも何だろうか。内発的／外発的動機づけや基本的心理欲求に関する理論によって知られ、かつその著書『自己決定の心理学』で著名なエドワード・L・デシは同書にて「内なる願望と知覚にもとづいて行動を選択する能力」(6)を「自己決定の基盤」(6)としている。そして「意志とは、自らの欲求をどのように充足すべきかを選択することのできる、人間の力量である」(33)とした上で「人びとは自分自身のために利用しうる、あるいはつくり出すことのできる行動上の選択肢の間で決定することができる」(33)と述べている。さらに「意志は他の動機をお預けにしたままでできるだけ多くの満足を企てるように動機を管理する能力をもっている」(33)と分析し、「自己決定は自己の意志を活用する過程である。」(34)と定義づけている。デシはそれをもう少し言葉を足しながら「自己の限界と制約を受容し、自分に働いている諸力を認識し、選択能力を活用し、各種能力の指示を得て、自己の要求を満たすことを意味している。」(34)と説明し、自己決定の意義を論じている。加えて、意志と有能さの関係性について「人びとは自己決定的で有能でありたいと欲求し、このことは、彼らが選択を行なうことを要請する」(34)と述べている。つまり、両者の関係は不可分であり、意志を持って選択できるということは自らに有能であることを示すと同時に、有能であると自覚できるためには意志を持って選択している、できているという状況が必要ということになる。

こうした自己決定と幸福感に関して、西村和雄・八木匡は「幸福感と自己決定—日本における実証研究」において自己決定力が向上し、自分で決められるという効力感が増加していくと人の主観的幸福度は高まるとの結果を発表している。西村・八木は自身らの先行研究を引き合いに出し、「支援型の子育てを受けた子供が、将来において、他のタイプの子育てを受けた子供よりも、高い幸福感を持っているという結果を得た。支援型の子育ての特徴は、子どもの自立を促すことにある。」(3)と子育てと成人後の幸福感についてもその関係性

を主張する。また、先にも引用したデシらの先行研究については「幸福感を決定する要因として自己決定が重要であることを示唆して」(4) いるとまとめている。そして、所得や学歴に関してはその金額や幸福である度合などを数値化して比較した結果、「自己決定で進学および就職を決定した個人は、不安感の程度が低いことを意味している。」(21) と結論づけ、特に不安感を引き下げることに限っては「自己決定をする人は、大学や職業等のミスマッチの可能性は少なく、たとえ失敗しても、自らが別の選択肢を試みることが可能であり、予め、それを用意しておくことも可能であることが不安感を低くしていると考えられる。」(22) との見解を示している。

よってデシの定義とその意味づけ、また西村・八木の自己決定と幸福感に関する研究を重ね合わせると、人は自己決定、自ら何某かに対して判断を下す意志を有してそれを行うこと自体に有能さを感じ、それがひいてはその人の幸福感にもつながっていると見てよいだろう。これが牧野富太郎とさかなクンの人生においても通底していることを以下、それぞれ見ていきたい。

2 事例研究

2.1 牧野富太郎

牧野富太郎は1862年に生まれ、1957年に没した日本の植物学者である¹。その功績はいくつもの書籍にてすでに明らかになっており、また2023年NHK連続テレビドラマ小説『らんまん』でもあくまで小説というフィクションを含むものではあるものの、その生涯が史実をベースに描かれている。高知県佐川町に生まれ、その後まだ鉄道網もそんなに発達していない時代に高知と東京を何度も行き来し、最終的には東京都練馬区大泉に居を構え晩年を過ごした。学歴的には当時の小学校中退で、かつその後日本国内でどこかの学校に進学したりはせず、よって大学に正規学生としての籍は置かなかったが、(旧)東京大学理学部植物学教室の門を叩き、研究のために出入りすることになる。その過程で新種の植物を発見するなどの功績をあげるものの研究室への出入りを禁止されるなどのトラブルにも見舞われる。しかしそれでも研究をやめることなく後

1 『MAKINO』によると「小学校中退、独学孤高の植物学者、日本の植物分類学の礎をきずく。収集した植物標本は約40万点にも及び、およそ1500種類の植物を命名した。それら植物の学名には「MAKINO」の名前が記されている。今も世界中の植物学者の中で「MAKINO」の名を知らぬものはいないだろう。」(6) とある。

に帝国大学理科大学助手になり、最終的には東京帝国理科大学の講師となる。牧野自身は大学教授などといった社会的地位への執着はなかったようで、むしろ植物を研究し続けられる環境にいられることこそ重きを置いていたようだ。このような境遇を経て植物学者として大成した理由として、牧野の生涯を小説化した作品²『牧野富太郎の恋』を著した長尾剛によると牧野には「ごくふつうの人間にはない“三つの大きな武器”があった。」(25)という。それらは「人柄」(25)、「類稀な「画才」」(25)、そして「圧倒的な財力」(25)だった。時にはその人柄ゆえに恨みや妬みを買うことがあり、また財力に関しても無頓着がゆえに周囲を心配させたことはあったという。そういう意味では俗にいう「いい人」なのか、あるいは状況を汲み取らない「鈍感な人」なのか、その判断が際どいところでもあるが本稿で着目したいのはそうした植物研究への牧野の尋常ならざる情熱の原動力である、好きという部分だ。12歳のときに植物の掛け図を見た牧野は「わしも、これをやりたい。一つ一つ植物の特徴を観分けて、名前を知って、仲間分けする。きっとこんなおもしろいことはない」(長尾、23)と思い、以来生涯植物学の道を様々な苦労や困難に見舞われながらも全うした。いわば、好きな植物への道に進むことをこの時点ですでに自己決定していたと言える。なおこのような牧野の、ある意味自由奔放ともいえる生活の背後には生涯にわたる植物研究を支え続けた大きな存在、牧野の妻である壽衛が欠かせないのだが彼女に関しては後述する。

2.2 さかなクン

もうひとり、好きを原動力にその道を極めて研究者になった人物がこの令和の時代にもいる。それは、さかなクン、である。さかなクン、1975年生まれで本名は宮澤正之、はその名の通り、おさかな大好きが高じて東京海洋大学名誉博士、客員教授にまでなった人物である。その功績は2012年に「海洋立国推進功労者」として内閣総理大臣賞を受賞したことで知られ、数々のテレビやメディアにも登場、2022年には『さかなのこ』という自身の半生を描いた映画も公開されている。彼の自伝的な書籍、『一魚一会』によると彼がさかなクンになりえた最大の要因を、「それは、“好きに勝るものはなし”ということ。好きだから、もっともっと知りたくなって、知れば知るほどたくさん感動を

2 牧野をモデルにした小説は他にも複数存在し、たとえば朝井まかでの『ボタニカ』(2022年)などがある。

いただいて、夢も広がって。そして「さかなクン」ができあがったのです。」(8)と綴っている。この、好きなもの、興味関心のあるものにとことん夢中になる姿勢、いわば好きな道へと進むという自己決定はすでに前項で見てきた牧野と同一線上であることはほぼ自明であろう。彼の少年時代のエピソードとして、「寝ても覚めてもタコタコ。休み時間も家に帰ってからも、図書室から借りてきた図鑑『水の生き物』のタコのページを眺めては、写真を見ながらタコの絵を描いていました。」(27)とあるが、これはミハイル・チクセントミハイのいう「フロー状態」、簡単にいうと対象に夢中になり時間を忘れ没頭、没入してしまうといった状態、に近い。そうした彼のことを早くから理解し、応援していたのは一番身近な存在である、彼の母親であったという。そのことを回想し、「タコを本当に飼うつもりであることを、信じていたのは母だけでした。親戚中が、すごいすごいとほめてくれたものの、飼う宣言に取り合ってくれる人は母以外誰もいませんでした。」(41)と述べている。これらの言葉からも推察されるように、理解者としての母親の存在をさかなクン自身、早くから感じていたのであろう。この応援者としての母親の存在に関しては、これも牧野同様に後述することとする。

3 二人の共通性と好きを支える応援力としての絶対的理解者の存在

3.1 絶対的理解者

ここまで牧野とさかなクンの来歴的な軌跡をそれぞれ簡単に見てきた³が、両者に共通する項目はすでに明らかなように、牧野は植物、さかなクンはさかな、と無論その対象はそれぞれ異なるが、両者ともにその対象が好きでたまらずその道を進むことにしたという自己決定に関する部分は共通している。また、両者ともに高等教育機関としての大学に正規学生としては在籍しなかったものの、その顕著な業績を讃えられ、大学より博士の称号を付与されているというのも奇遇ではあるが一致している。つまり、両者とも好きなものを好きなだけ追いかけていたら、気がついた時にはその道のプロフェッショナルになっていたと言えよう。これらは経歴的な表面上での類似点であるが、すでに指摘したように牧野には妻が、さかなクンには母親が、それまでの過程においてと

3 本稿のように牧野とさかなクンを比較した学術的な論文や書籍は見当たらないがウェブのサーチエンジンで両者の名前で検索すると彼らを共通するものとして指摘している記事は複数散見される。

でも大きな影響を及ぼしている。よって以下、彼らを支えた者たちの存在意義について考察したい。

上述のように、牧野には妻が、そしてさかなクンには母親が、常に寄り添っていた。それはいうなれば絶対的理解者とも称すべき存在でその定義を本稿では、何があっても必ず味方になり応援してくれる人、とする。ではここで牧野の妻とさかなクンの母親の言動を順に検証したい。まず牧野の妻、壽衛に関してはこんなエピソードがある。研究のために通っていた帝大理科大の植物学教室を出入り禁止にされた際、落ち込む牧野に壽衛は「旦那様が次々とすばらしいお仕事をなすっていくのを目の当りにして、矢田部先生は、旦那様を恐れ始めたのですよ。学者として旦那様に嫉妬心をお持ちになったのですよ」（長尾、102）と言ってなぐさめた。そんなことは露も思っていなかった牧野はその言葉に大きな衝撃と勇気を得ている。また、借金取りに追われ、引っ越しを繰り返す羽目になった際もその状況を詫げる牧野に壽衛は「おやめください。いつも申し上げているではありませんか。旦那様には、ただ思うがままに学問に精進していただきたい、と。」（長尾、150-151）と語りかけ、牧野の前ではなんら憂うことなく常に凜とした姿を示していた。こうした壽衛のどんな時も牧野の味方であるという一貫した揺るがない姿勢が牧野の研究と、そして人生そのものを支えていたのである。

つぎに、さかなクンの母親は基本スタンスとして「こういうとき、母がいっしょにいてもいっさい口を出してきません。お店にお願いするときも、ぜんぶ自分でやるのです。母はただ後ろで見守ってくれているだけ。」（さかなクン、58）だったという。つまり、応援することと介入することとは完全に別物ということである。換言するならば、自律を促し、本人に選択、そして自己決定させ、それに伴うあらゆる経験を見守っていたのだろう。つまりは本人自身とその自己決定への徹底的な尊重である。特筆すべきは学校の先生への言葉、「あの子は魚が好きで、絵を描くことが大好きなんです。だからそれでいいんです。」（72）で、さかなクン自身も「母の態度は一貫していました。先生に語ったこの言葉どおり、「勉強なさい。」とか「お魚のことは、これくらいにしときなさい。」などと言ったことは、いっさいありませんでした。」（73）と回想しているように、好きなことに没頭することを応援し、またそれがさかなクンにも伝わっていたことがなにより大きな力となったことは想像に難くない。また、中学校時代にはカブトガニを学校で飼育することになったと知ると「母はその水槽セットと人工海水の素をすぐさま購入し、そのまま理科室へと運んで

くれたのでした。」(126) といったエピソードや、バスクラリネットをやってみたいと言うと「大丈夫よ。こういうときのために、コツコツためてた定期預金、おろしてきたから。」(160) と本人すらびっくりするような行動を母親が取ったこともあった。また、進路に迷った際には「そう思うなら、そうしたらいいよ。一度しかない人生なんだから。自分の決めたことがいちばんよ。お母さんは応援してるから。」(198) との助言もしており、これらがいかに彼の支えとなったかは「むしろ、どんどんお魚に夢中になっていく自分をよろこんで応援してくれるのです。将来の進む道を見つけられずにいたときも、なにも言わずあたたかく見守っていてくれました。」(239-240) から自ずと推し量られるだろう。もうすでに明らかのように、こうした一連の母親の言動は自己決定の尊重とそれへの応援以外のなにもでもない。

両者を鑑みるに、彼女たちは単に夫や息子といった対象を応援するだけに留まらず、あくまで彼ら自身での判断と決定、いわば自己決定を促しながらそれを尊重している。つまり、絶対的理解者はどこまでも対象を信じ、何があろうとその決定と彼ら自身を支えようとする存在⁴と言える。翻ってそれがゆえに彼らも彼女らを信頼し、その存在に惜しみない感謝の念を口にするのだろう。

3.2 絶対的理解者と逆の存在

さて、こうした絶対的理解者とは対照的なのは支配しようとする（自己決定をさせない、自分の選択を押しつける）者である。ここではその一例として、フィクション上の人物ではあるが、辻村深月が2019年に発表した小説『傲慢と善良』に登場する女性主人公、真実の母親、陽子を取りあげたい。『傲慢と善良』は青年、西澤架が同世代の女性、坂庭真実と交際し婚約するのだが、いざ結婚へと至る寸前に真実が謎の失踪、架がその謎に挑むという物語である。小説の前半は架の視点で物語は語られていくが後半は真実の視点、つまり語り手が架から真実へと置き換わるという設定になっている。その中で前半後半、両者の視点を通してこの物語の鍵のひとつとなっているのが真実の母親の存在、そして言動である。

よってここではそれらを具体的に引用しながら検討する。まず、架は真実が

4 「ビリギャル」の呼称で世間の注目を集めた小林さやかかの大学受験における軌跡をまとめた坪田信貴の『学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話』には彼女のお母さんが同様の存在として紹介されている。

失踪した後に初めて彼女の母親である陽子に会った際の違和感を「真実は、もう三十過ぎの立派な大人だ。その彼女の歩む道や選択にすべて口出しし、自分たちの手元から出すべきではなかったと思うのは、親だとしてもあまりにも傲慢なのではないか。」(126)と述べる。また、真実が上京して一人暮らしを始めた際の経緯についても「決めていた、というその決意は、あくまで陽子一人の決意だ。家を出るかどうかは真実の選択であって、それは陽子が決めることではない。」(127)とその圧力的な姿勢に疑義を呈す。そうしたことから架は陽子の言動を「自分の目に見える範囲にある情報がすべてで、その情報同士をつなぎあわせることには一生懸命だけど、そこ外に別の価値観や世界があることに気づかないし、興味もない。」(129)と判断し、「陽子は娘がかわいくて仕方ないのだ。…親が結婚相手まで決める人生に抵抗はなかったのかもしれない。しかし、この違和感は、もっと言うなら不快感だった。真実の人生が狭い価値観の中で蹂躪されている。」(144)と陽子の思考とそれまでの言動を「不快感」という言葉を使って結論づける。一方、当の真実自身も「私はずっと、お母さんの言う通りにしてきてしまったせいで、今、こんなことになっているのかもしれない。」(307)と現状を分析する。真実にそう思わせるひとつの要因として陽子の見間違いとも言える架への批判があり、真実はそれに対して「自分がこの両親の前ではどこまでも子どもで、信じられていないのだ、ということを感じず。信じられていないから、選んだ相手のことも、ギャンブルはするのか、とか見間違いな心配でケチをつける。」(337)と心の中で反発する。その真実の言葉はさらに辛辣さを増し、「全部「心配」という言葉で縛り、無言で不機嫌になって、私をこの家からあまり外に出したくなさそうだったのは、あなたたちじゃないのか。」(339-340)、「すべては母の乏しい経験則と伝聞した内容からの、くだらない思い込みだ。」(340)とかなり批判的になっていく。その想いは陽子とそして真実自身に対しても「こんな差別的なことを言うような常識しかない、世間知らずなこの人に、「真実のことが心配」と言われ、「家の鍵を返しなさい」と言われてきたのか。東京に行く、と伝えた時、「そんなことに何の意味もない」と反対されたのか。「結婚するまでは責任もってうちでみる」と、言われてきたのか。」(341)とぶつけながら真実は苛立ちを隠せない。

上記の引用からもわかる通り、端的に言うと母親である陽子は娘の真実に自己決定をさせない、あるいはその機会を心配の名の下に悉く奪っているといつてよいだろう。これを、本稿の前半で述べてきた牧野の妻やさかなクンの母親

と対比してみるとどうだろうか。その対応の差は否が応でもあたかも明暗のように対照的である⁵ことがわかる。

4 考察

よってここではこれまで見てきた牧野富太郎とさかなクン、牧野の妻、壽衛とさかなクンの母親、そして『傲慢と善良』における真実の母親である陽子の関係を比較対照的に今一度整理してみる。

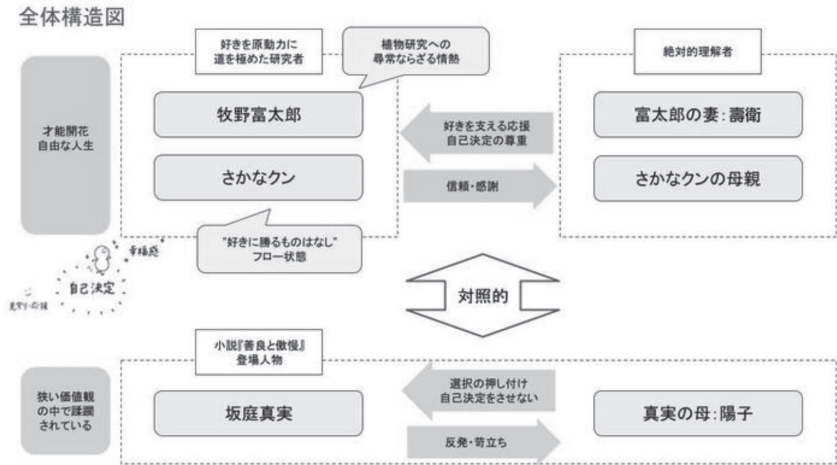


図1 (森田敦子作成)

図1からもわかるように、また前項でも検討してきたように、まず牧野とさかなクンは好きを原動力に自らの道をその才能と共に進んでゆく。それを見守りながら、時に支えとなっているのが図1の中では彼らの右側に位置する牧野の妻、壽衛とさかなクンの母親である。彼ら、彼女らの存在、そして関係性が共通しているのは図にしてみるとより鮮明になる。なお、図1の中の牧野とさかなクンの左下に位置する自己決定と幸福感に関するイラストはAppendixに拡大版を掲載してある。彼らのこうした相互に良好な関係性と全く対照的な

5 親が子の興味に理解を示さないことへのシニカルな視点に立った志賀直哉の短編小説「清兵衛とひょうたん」もこの文脈では興味深い参考文献となるので記しておく。

が『傲慢と善良』における坂庭真美と陽子の関係性である。真実と陽子はそもそも理解しあえていないのと同時に、支えどころかむしろ障害に近い存在になってしまっている。真実は才能を開花するどころか、個性やひとりの人としての価値観、選択権すら奪われ抑圧された状態にある。よって牧野の妻、壽衛とさかなクンの母親、そして『傲慢と善良』の陽子を見てみるともう明らかなように、絶対的理解者は相手を信じ、応援し、なんであれその自己決定を尊重することが相手の才能を開花させ、自由に生きることを促し、翻って感謝される、つまり彼らは相互に良好な関係を築くことができるのがわかるだろう。

おわりに

本稿は自己決定と絶対的理解者の存在意義に関して、好きという気持ちを原動力に研究の領域にまで踏み込み、類稀なる功績を残してきた牧野富太郎とさかなクンを事例にその人物像と彼らを支えてきた絶対的理解者の存在意義について考察しようと試みてきた。まずは先行研究を引用しながら自己決定の大切さについてまとめ、その後牧野とさかなクン両者の経歴的な軌跡を具体的に確認しながらその共通性を見た後に彼らを支えた絶対的理解者の存在、牧野の妻、壽衛とさかなクンの母親について検討した。またそれとは逆の存在と価値観を辻村深月の小説『傲慢と善良』に登場する女性主人公、真実の母親、陽子の言動を吟味し、それがいかに対照的であるかも見てきた。前項の考察でも述べたように、絶対的理解者は相手のことを信じ、時に見守りながら応援し、どういふ結果が待っているにせよその選択、いわば自己決定を尊重することがその相手の才能を開花させ、そして自由に生きることを促し、翻って自分たちも感謝されることになる、つまりは相互に良好な関係を築いていくことができることを明らかにした。

なお本稿は文献としては牧野富太郎については自伝を基にした小説を、さかなクンについては自叙伝を、そしてさらには辻村深月の小説を、とやや趣の異なったものをそれぞれ用いてきたのでその点に関してやや一貫性に欠ける部分があることは十分に承知している。また、絶対的理解者はいないが好きを原動力に生きてきたものたちとの比較はできてはいない。しかし、こうして様々な文献、あるいは側面から自己決定の大切さ、ならびに絶対的理解者の存在の意義を考察してみようと試みることでそれ自体がこの分野へのさらなる研究の一助ないし契機になるならば、それが本稿の意味でもあるし、執筆者一同の願いでもあると述べ、本稿のおわりとしたい。

自己決定と絶対的理解者の存在意義 一事例研究としての牧野富太郎とさかなクン、そして『傲慢と善良』

参考文献

エドワード・L・デシ著、『自己決定の心理学』、石田梅男訳、誠信書房、1985年。

高知新聞社編、『MAKINO - 生誕160年 牧野富太郎を旅する -』、北隆館新書、2022年。

さかなクン、『さかなクンの一魚一会』、講談社青い鳥文庫、2021年。

辻村深月、『傲慢と善良』、朝日新聞出版、2019年。

長尾剛、『牧野富太郎の恋』、朝日新聞出版、2023年。

西村和雄、八木匡、「幸福感と自己決定—日本における実証研究」（改訂版）、独立行政法人
経済産業研究所、2020年。

Appendix: (杉浦佐知子作成)



